

11月7日 年間第32主日

Ⅱマカ 7:1~14 Ⅱテサ 2:16~3:5 ルカ 20:27~38

1. ルカ

v.27 「さて、復活があることを否定するサドカイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに尋ねた。」

イエスの時代の厳格なユダヤ教的敬虔は、旧約聖書の解釈を基礎としていました。彼らの信仰と生活に関するすべてのことが、聖書に由来し証明されなければならないのでした。地方の庶民の間で影響力を發揮していたファリサイ派の活動によって、律法学者による聖書の解釈が“昔の人の言い伝え(マコ7:1-13他)”として広く普及していました。それに対して、エルサレムとその神殿を拠点とするサドカイ派の人々は、教義の発展や再解釈を嫌い、律法(モーセ五書)に書かれていないことをすべて拒否する保守主義者でありました。両者とも旧約聖書を重視していました。しかし彼らにとっての聖書は“神のことは”ではなくて“律法の体系”となっていました(ロマ9:30-32参照)。

彼らの質問に対するイエスの答えは、意表をつくものでした。

v.38 「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである。」

旧約の預言者エリヤは「主は生きておられる」という言葉をもって救済史の舞台に登場しました(王上17:1)。預言者エゼキエルに臨んだ主の言葉は、「わたしは生きている」であり、「イスラエルの家よ、……お前たちは立ち帰って、生きよ」であました(エゼ17:19, 18:31-32他)。しかし当時、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」という出3:6の言葉を復活の論拠とする“昔の人の言い伝え”がユダヤ教に存在しなかったために、人々はイエスの答えに驚いたのでした。

2. Ⅱテサ

現代のキリスト教も、教会の使命は人々に慰めと希望を与えることだと主張しています。そして数々の解釈が語られて来ましたが、しかし現代のキリスト者の多くは、信条で宣言されている「死者の復活と来世のいのち」を信じていないのが実状です。

しかし聖書が伝える“使徒たちの福音”によれば、私たちの主イエス・キリストが与えてくださったのは、「永遠の慰め(復活)と確かな希望(神の国)」(v.16)であることを、全世界の教会は今朝の朗読を通して聞かされているのです。21世紀の教会はこのことに驚かなければなりません。

典礼暦の最後の三主日は伝統的に、終末の日について学ぶように聖書の日課が配分されて来ましたが、それは生きている者と死んだ者を裁くためにキリストが再臨される日であり(Ⅱテモ4:1参照)、私たちが復活の体を与えられて神の国を受け継ぐ勝利の日です(Ⅰコリ15:50-58参照)。我が国の各小教区のミサが、この典礼暦の趣旨に添った教育的効果を發揮するようになることを、私たち会衆は祈らなければなりません。

ん。使徒パウロの手紙を通して、私たちは復活の主の呼びかけを今朝聞かされているのですから。

vv.2-3 「すべての人に、信仰があるわけではないのです。しかし、主は真実な方です。必ずあなた方を強め、悪い者から守ってくださいます。」

3. II マカ

アンティオコス・エピファネス時代(BC.175-164)のユダヤ教迫害を物語る II マカ は、ファリサイ派によって書かれたもので、そこに描かれた殉教精神は初代教会に大きな影響を与えました。おそらくサドカイ派の手になると思われる I マカ の記録によって、私たちはかなり正確に当時の歴史的背景を知ることが出来るのですが、王とユダヤ上層部が望んだのはヘレニズム文化へのユダヤ宗教の適合であったと思われます。先祖伝来のユダヤ教は、今や普遍的人間文化の中に適合吸収されることが、時代に即応することであると考えられたのです。これはユダヤ宗教そのものの廃止ではなく、ただ排他的旧守的なユダヤ教祭儀と律法への固執を王朝に対する離反として断罪したのでした。

現代における宗教一般の普遍主義的傾向と、それに共感するキリスト教のかなり大きな部分の歩みの姿が、これと非常に似ているのが分かります。しかし宗教を文化の一部、一要素として理解すれば、そこにはもはや聖書が伝える“使徒たちの福音”の語られる場所はありません。なぜならそれは、「今おられ、かつておられ、やがて来られる方」(黙 1:8) から使徒たちに委ねられたものであり、文化ではなくて(復活の)確かな希望を、普遍主義ではなくて(神の国の)永遠の慰めを伝えるものだからです。

私たちを「永遠の新しい命へと甦らせてくださる」(v.9) イエス・キリストは、復活して父なる神の右の座に着き、終末の日の再臨を待ち続けておられます。 アーメン、ハレルヤ。

11月14日 年間第33主日

マラ 3:19～20a IIテサ 3:7～12 ルカ 21:5～19

1. ルカ

v.7 「そこで、彼らはイエスに尋ねた。“先生、では、そのことはいつ起こるのですか。また、そのことが起こるときには、どんな徴があるのですか。”」

キリストの福音は“世の終わり”(v.9)に関わる“神の国の福音”(ルカ 4:43)であって、教会は代々にわたって“私たちの希望、救い主イエス・キリストが来られるのを待ち望んで”来ました(ルカ 21:27)。使徒たちはこの福音の証人となった人々でありました。彼らはこの福音のためにあるいは迫害を受け、あるいは殉教の死を遂げました。そしてそれはキリストとその福音を証しする最高の機会となったのでした。vv.8-11はいわゆる黙示文学的表現であって、これを無理に一世紀の特定の出来事に結びつけて説明しようとするのは適当ではありません。まして後の時代の歴史を予告する“お告げ”などではありません。「しかし、これらのことがすべて起こる前に」(v.12)、「まず、福音があらゆる民に宣べ伝えられねばならない」(マコ 13:10)ことが、今朝の福音の日課の主題であります。

使徒たちを通して語るのは復活されたキリスト御自身でありました(v.15)。「遣わされた者」(ヨハ 9:7)の口に神は言葉を授け(エレ 1:9)、「この私があなたの口と共にあって、あなたが語るべきことを教えよう」(出 4:12)と言われます。聖霊が語らせるとは、そういうことです。彼らは「忍耐によって、命を勝ち取り」(v.19)ました。ですから使徒パウロも自分の後継者テモテに書き送って言いました。「信仰の戦いを立派に戦い抜き、永遠の命を手に入れなさい。」(Iテモ 6:12)

2. IIテサ

世の終わりは近く、「この世の有様は過ぎ去る」(Iコリ 7:31)というので、すでに早い時期から教会には仕事や実生活から安易に逃避する人々がありました。そのような人々のことを使徒パウロは、「怠惰な生活をし、少しも働かず、余計なことをしている者」(v.11)と言っています。そして「私たちから受けた教えに従わないでいるすべての兄弟を避けなさい」(v.6)と書きました。

典礼暦の最後の三主日のミサのための朗読配分は、世の終わりに関わるテキストで構成されています。代々の教会はこの期節に、「私たちは皆、神の裁きの座の前に立つ」(ロマ 14:10)ことと「この神に対して、私たちは自分のことを申し述べねばならない」(ヘブ 4:13)ことを、聞かされて来ました。しかしそれは、いささかもこの世における実生活を軽視しているのではなくて、むしろ各自が信仰の戦いを立派に戦い抜くことをこそ教えるためでありました。

「自分で得たパンを食べるように、落ち着いて仕事をしなさい。」(v.12)「私が命じておいたように、落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み、自分の手で働くように努めなさい。」(Iテサ 4:11)「怠けている者を

戒めなさい。」(Iテサ 5:14) しかしそれは神の国到来の福音を信じないからではなくて、むしろ「キリストの日に備えて、清い者、とがめられるところのない者となり、イエス・キリストによって与えられる義の実をあふれるほどに受ける」(フィリ 1:10-11) ためであります。

3. マラ

v.19 「見よ、その日が来る。炉のように燃える日が。」

イザヤ書も語っています。「我々のうち、誰が焼き尽くす火の中にとどまりえようか。我々のうち、誰がとこしえに燃える炉の中にとどまりえようか。」(33:14)

使徒パウロも言いました。「死に定められたこの体から、誰が私を救ってくれるでしょうか。」(ロマ 7:24)

実にキリストは十字架にかかって、終末の日に私たちが裁かれるはずのその罪を身代わりに担ってくださいました。そのお受けになった傷によって、私たちはいやされたのです(Iペト 2:24)。

v.20 「しかし、わが名を畏れ敬うあなたたちには、義の太陽が昇る。その翼にはいやす力がある。」

4. ルカ

ルカ福音書は、マルコの同じ物語りから場所と人名に関する部分を除外しました。この物語りの原型は「イエスがオリーブ山で神殿の方を向いて座っておられると、ペトロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかに尋ねた」となっていました(マコ 13:3)。かつてエルサレムの神殿の破滅と使徒たちの運命について語られたイエスの言葉を、ルカはそこから後の時代の人々への神のことは聞くべき物語りとして、修正して取り入れたものと思われます。

現代における使徒の後継者としての司教たちを通して福音を語る方も、復活されたキリスト御自身であります。使徒たちが一つの団体を構成していたように、彼らはローマ教皇と共に一つの司教団に属しています。また司教に従属する司祭たちも各々キリストの代理者として行動し、福音の宣教の使命を担っています。しかし現実の歴史の教会において、各々の司教や司祭が個別に不謬の特権を持っているわけではありません(教会憲章 25)。私たちが今朝の朗読で聞いた福音書の言葉は、私たちのミサで、私たちの司祭を通して、復活のキリストのことは、キリストの来臨と神の国の到来の福音が、実際に語られているかどうかを問いかけています。私たちは人の言葉によってではなくて、「神の変わることはない生きた言葉によって」(Iペト 1:23) 歩む民なのですから。司教と司祭のために祈って神に執り成すことは、会衆の大切な努めであります。

ハレルヤ、アーメン。

11月21日 王であるキリスト

サム下 5:1～3 コロ 1:12～20 ルカ 23:35～43

1. ルカ

v.42 「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください。」

v.43 「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる。」

私たちの主イエス・キリストは、到来する神の国の王であります。終わりの日とは、王であるキリストが「大いなる力と栄光を帯びて」(21:27) 再臨される日のことです。代々の教会は典礼暦の最後の主日に、ミサで朗読される日課を通してこのことを思い起こして来ました。

人々がキリストの再臨をもはや信じなくなり、それ故に私たちに与えられた救いの終末的意義を理解出来なくなると、教会の信仰(感謝の典礼の中の“教会に平和を願う祈り”)が単なる世俗の宗教心に置き換えられ、典礼暦最後の三主日が固有の終末の主題を取り上げていることも忘れられるようになります。私たちは今そのような時代に生きています。「今はあなたたちの時代で、闇が力を振るっている」と主は言われました(22:53)。

なぜイエスは弱い者のように(II コリ 13:4)十字架につけられて死んだのでしょうか。「言うておくが、“その人は犯罪人の一人に数えられた”と書かれていることは、わたしの身に必ず実現する。」(ルカ 22:37) その死を越えて、主は到来する神の国の王となりました。ルカ福音書が伝える十字架の上でのイエスと犯罪人との問答は、このことを前提としてのみ意味を持っています。

2. コロ

w.12-14 「喜びをもって、光の中にある聖なる者たちの相続分に、あなた方が与えるようにしてください。御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました。わたしたちは、この御子によって、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです。」

典礼暦は、代々のキリスト者が「天に蓄えられている希望」(コロ 1:5)「(使徒たちから)聞いた福音の希望」(コロ 1:23) から離れないために、大切な役割を果たして来ました。司教たちや司祭たちの大部分が福音の終末的意義を忘れてしまった時代にも、天上のキリストは主日のミサの聖書朗読を通して私たち会衆に語り続けて来られました。私たちのミサを司る司祭は今朝も再び唱えます。「私たちの希望、救い主イエス・キリストが来られるのを待ち望んでいます。」 それに応じて会衆一同も声をそろえます。「国と力と栄光は、限りなくあなたのもの。」

3. サム下

ダビデはそれまでユダ一部族の王でしかありませんでした(サム下 2:4)。その前は 400 人ほどの徒党の

頭領でした(サム上 22:2)。その彼がヘブロンで油を注がれて神の民イスラエルの王となりました。ですからダビデの王座(ルカ 1:32-33)とは神の民の王座のことであって、父なる神は復活のキリストにこの王座をお与えになりました。

ですから、御子の血によって贖われて神の国の国籍を与えられた者たちは「神のイスラエル」(ガラ 6:16)であり、キリストは復活して神の国を受け継ぐすべての人々の王なのです。キリストがすべての人の救い主であるということは、必ずしもすべての人が復活の日に神の国を受け継ぐという意味ではありません。ましてや神が天地万物を支配する王であるということが、ダビデの王座を無意味にすることはありません。

「いかに美しいことか、山々を行き巡り、よい知らせを伝える者の足は。

彼は平和を告げ、恵みの良い知らせを伝え、救いを告げ、

“あなたの神は王となられた” と、シオンに向かって呼ばれる。

その声に、あなたの見張りは声をあげ、皆共に、喜び歌う。

彼らは目の当たりに見る、主がシオンに帰られるのを。」(イザ 52:7-8)

王であるキリストの祭日に、キリストの福音の“良い知らせ”を聞き取ることが出来る人は幸いです。

ハレルヤ、アーメン。

11月28日 待降節第1主日

イザ 2:1～5 ロマ 13:11～14 マタ 24:37～44

1. ロマ

v.12 「夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身につけましょう。」

典礼暦の新しい一年が始まりました。キリストが再臨される日がさらに近くなりました。キリスト者とは、与えられた救いが完成するその日を待望している民であることを、代々の教会は典礼暦の最初に位置する待降節によって表現して来ました。

ローマ・カトリック教会の「典礼暦年と典礼暦に関する一般原則」は、この期節について次のように述べています。“待降節は二重の特質を持つ。それはまず、神の子の第一の来臨を追憶する降誕の祭典のための準備期間であり、また同時に、その追憶を通して、終末におけるキリストの第二の来臨の待望へと心を向ける期間でもある。この二つの理由から、待降節は愛と喜びに包まれた待望の時であることが明らかになってくる。”(39)

待降節第1主日に私たちは、その日が今や近づいた(v.11)ことを覚えるのです。この日のミサの朗読配分が主張しているものは、福音の終末的使信であり、特にその“今”という性格です。それは典礼暦全体を一貫している基本的な観念であります。なぜなら典礼暦は、会衆にその信仰生活の基礎となっている救済史を、一年の間に今存在する現実として経験させることを目的としているからです。この典礼暦を作るのに、各時代が貢献して来ました。第二バチカン公会議後の典礼刷新も、この尊い典礼暦をより分かりやすいものにするために朗読配分に手を加えたのです。

「あなたがたが眠りから覚めるべき時」(v.11)を、会衆一同に“今”として信仰的に体験させるために、私たちの教会のミサは効果的にささげられているでしょうか。教会が使徒継承によって福音の終末的使信を受け継いで来ていることは確かなのですが、残念ながらこれまで私たちは実際には、司祭や司教を通じてそのような使信を聞いたことが殆ど全くありませんでした。「今はあなたたちの時代で、闇が力を振っている。」(ルカ 22:53) それでもこの待降節第1主日の朗読配分が、福音の終末的使信の“今”を確かに主張し続けて来ていることに、私たちは感謝しようではありませんか。

2. マタ

vv.38-39 「洪水になる前は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた。そして、洪水が襲って来て一人残らずさうまで、何も気がつかなかった。人の子が来る場合も、このようである。」

人はみな例外なく日常生活を歩んでいます。信仰とはこの日常生活から脱出することではなくて、まさにその中で「人の子が来る」という将来の事実を目覚めていることなのです。キリスト信者もそうでない人も、外見上は区別出来ません。また外見上区別出来るような信仰集団を作って特別な生活していても、そ

の日は一人残らずを同じように襲うのです。そしてその日には、「一人は連れて行かれ、もう一人は残される」こととなります。私たちの希望は、この再び来られるキリストにかかっていることを思いましょ。う。「かの日、主が来られるとき、主は御自分の聖なる者たちの間であがめられ、また、すべて信じる者たちの間でほめたたえられるのです。」(II テサ 1:10)

3. イザ

v.2 「終わりの日に ……」

現代のエルサレム旧市街はイスラム教徒、ユダヤ人、キリスト教徒、アルメニア人の四つの地区に分けて管理され、かつての神殿の丘には7世紀末に建てられたイスラム教のモスクがあります。その神殿の丘の西側の壁がユダヤ人地区に面していて、ユダヤ教徒たちはこれを“嘆きの壁”と呼んで昔をしのび、涙を流すことによって今もエルサレムの回復を祈っています。中東和平は現代世界の最重要課題の一つではありますが、そのためのロードマップは幾たびもの挫折を繰り返して来ました。ましてエルサレムの最終的帰属などという問題が政治的に解決される可能性は、全く霧の中です。

それでも、聖書を通して語る神は、生きておられます。復活されたキリストはこのイザヤ書の言葉によって、代々のキリスト者に向かって語り続けておられます。

w.3,5 「多くの民が来て言う。“主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう ……」と。

ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。」

人間の能力によって、政治的解決によって、ましてや平和運動や NGO 活動などによってこのイザヤ書の言葉が実現出来ると考えるなら、それは空しい夢でしかありません。神が、来たり給うキリストこそがそれを実現されるのです。待降節第1主日に、私たちは福音の終末的使信の“今”を信仰的に体験します。「ヤコブの家」とはイスラエルのことであり、教会こそは正に新しい「神のイスラエル」(ガラ 6:16) なのですから。 ハレルヤ、アーメン。